

長引くせきは赤信号

結核にご注意を

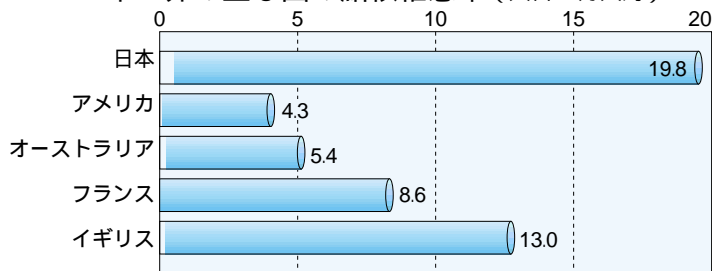


結核予防啓発キャラクター「シール坊や」

結核は、決して過去の病気ではありません。「風邪だろう」という思い込みが結核の発見を遅らせています。結核は現在でも「日本最大の感染症」なのです。

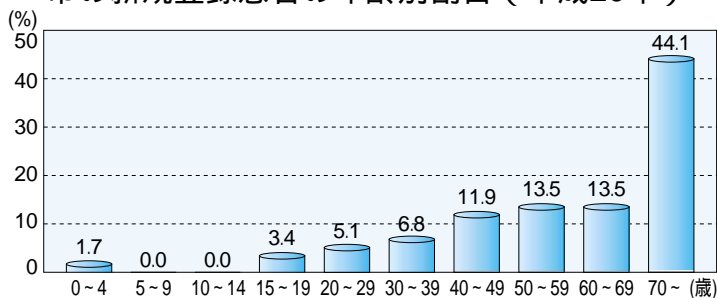
3月24日は、世界結核デーです。これを機に、結核に対する正しい理解を深め、予防に努めましょう。

2007年世界の主な国の結核罹患率（人口10万人対）



罹患とは病気にかかることを意味し、罹患率とは、一定の期間にある集団の中で新たに特定の病気にかかる危険度を表します。通常、人口10万人当たりの数値で示します。

市の新規登録患者の年齢別割合（平成20年）



日本は結核の中まん延国

2008年（平成20年）に結核に感染し発病した患者数は、全国で2万4760人にも上り、日本は、先進国の中でも罹患率が高く（左上の表1）、依然として「結核中まん延国」と言われています。これは、余病を持った高齢者が増加したことで結核発病が促進されたことに加え、結核に対する意識の低下からくる発見の遅れが、さらにそれを助長していることが主な原因と考えられています。

また、本市の結核患者新規登録者の年齢をみると（上の表2）、60歳以上が全体の半数以上を占めており、体力や抵抗力が衰え始めている高齢者は特に注意が必要です。

免疫力の低下で結核菌が目覚めます

結核は、結核菌を吸い込むことで主に肺に炎症を起こす病気です。結核患者がせき・くしゃみをしたときに飛び散る結核菌を吸い込むことで感染します。ただ、普通は免疫の働きで発病を防ぎ、感染した人で一生のうち発病するのは10人に1人程度といわれています。感染して1〜2年で発病する場合と、何年も経って体が弱ってきたときに、眠っていた結核菌が目覚まし、発病する場合があります。無理なダイエットや不規則な生活、加齢や糖尿病などで免疫力が弱っているときは発病しやすくなります。

結核の初期症状は風邪とよく似ています。風邪薬を飲んでも、2週間以上も微熱やせきやたんが止まらないときは危険信号です。放っておくと肺の中で結核菌が増殖し症状が進行して、他人に感染させる恐れが出てきます。症状が現れたときは、早めに医療機関を受診しましょう。早期に発見し治療をすることで、他人にうつす恐れもなくなります。

風邪によく似た初期症状 油断せずに受診を

結核を予防するための3つのポイント

1 年に1回は定期健診を

年に1度、健診を受け、胸部レントゲン検査を行えば、万が一結核を発病しても早い

段階で分かるので、大規模な集団感染を防ぐとともに、入院しなくても治療ができます。

2 生後6カ月未満にBCG予防接種を

抵抗力の弱い乳児の結核は重症化しやすく、死に至ることがあります。できるだけ早い時期にBCG接種を確実に受けましょう。

3 結核に負けない体づくりを

現在の高齢者は若いころに結核の流行を経験している、既に結核に感染している人が多く、体力・抵抗力が低下したときに、眠っていた結核菌が目覚まして発病するケースが増えています。症状が現れたら、早めに専門医の診断を受けることが重要です。日ごろから健康に留意し、体力や抵抗力を弱めないような生活を心掛けましょう。

3月24日は世界結核デー

ローベルト・コッホは、1882年3月24日、結核菌の発見を学会で発表しました。世界保健機関（WHO）は、結核問題の重要性を警告し、対策の強化の必要性を訴えるため、この日を「世界結核デー」と制定しました。

この特集についての問い合わせは、保健予防課 ☎(626)1114へ。